

# デスマス形と非デスマス形との 「混合体」に関する考察

—日本人ビジネス関係者の待遇コミュニケーションから—

福島 恵美子

## 要 旨

日本語を使用するビジネス現場では、「場面」（「人間関係」と「場」）に応じた待遇表現の使い分けが重要であると考えられている。そのため、外国人ビジネス関係者を対象とした日本語教育では、待遇表現の指導に時間を割いている。しかし、外国人ビジネス関係者からは「ビジネス場面では待遇表現があまり厳密に使い分けられていない」と聞くことがある。どうして彼らはそのように感じるのだろうか。その原因を探るため、パイロット調査を基に考察した結果、「デスマス形」と「非デスマス形」（2章9、10参照）が混合した「混合体」（2章15参照）が様々な「場面」と「状況」で見られるからではないかと考えるようになった。このような考えに基づき、「ビジネス場面」における「混合体」の実態を調査・分析し、「混合体」が現れる要因を探ることを目的として研究を進めた。その結果、今回のデータには、「丁寧体」や「普通体」（2章13、14参照）だけで成り立つ会話は見られなかった。つまり、様々な「場面」と「状況」で「混合体」が見られることが分かった。また、「混合体」が現れる要因も明らかになった。

## キーワード

混合体・話体・デスマス形・非デスマス形・話段

## 1. 研究目的

日本語を使用する「場面」において、その「場面」を適切に認識し、ふさわしい表現形式を使用することが良好な「人間関係」を構築・維持するために重要である。それは、どのような「場面」においても同様であるが、中でも「ビジネス場面」においては、ふさわしくない表現形式を使用し、相手に不快感を与えた場合、個人の問題にとどまらず、所属する部署や会社にまで被害を及ぼしてしまうこともある。そのため、他の「場面」よりも適切さが求められる。

以上のような理由で、外国人ビジネス関係者を対象とした日本語教育では、待遇表現の

指導に時間を割いている。しかし、日本語を学習している外国人ビジネス関係者からは「日本人ビジネス関係者は、学校で習ったように「場面」によって表現を厳密に使い分けているわけではない」という話を聞くことがある。どうして彼らがそのように感じるのか、仕事をした経験から内省し、パイロット調査による会話データを基に考察した結果、「デスマス形」と「非デスマス形」が混合した「混合体」が、様々な「場面」と「状況」で見られることが原因ではないかと考えるようになった。実際には「デスマス形」や「非デスマス形」だけが使用される「場面」は少ないのではないだろうか。「デスマス形」基調、あるいは「非デスマス形」基調と、「混合体」の内容が異なっても、「混合体」が見られる「場面」と「状況」が多いと考えられる。

このような考えに基づき、まず「混合体」について規定した上で、「ビジネス場面」における「混合体」の実態を調査・分析する。そして、その結果から「混合体」が現れる要因を考察し、待遇コミュニケーション教育への提言をすることが本研究の目的である。

## 2. 用語の規定

本研究を進めるにあたり、各用語を次の通り規定する。

- 1) 場面：蒲谷（2003：1）に基づき「[人間関係]と「場」の総称」と規定する。
- 2) ビジネス場面：水谷（1994：15）の「仕事とは直接関わらない会話がビジネス活動を成功させる基盤になっている」という考えに基づき、ビジネス活動を行う時だけではなく、アフターファイブや休憩時間などを含んだ「場面」とする。
- 3) 状況：コミュニケーションの内容を意味する。打合せ、会議における報告、協力依頼や、休憩時間における雑談などである。
- 4) 相手レベル：蒲谷他（1998：8）では上下関係と「親疎」を組み合わせたものとして「相手レベル」を設定しているが、本研究では上下関係だけと規定し、「親疎」と分けて考える。上司や取引先の人など「+1」、同年配の人など「0」、部下や後輩など「-1」として3つのレベルに分ける。
- 5) 場レベル：蒲谷他（1998：16）に基づき「改まった場」か「くだけた場」かという観点で考える。会議、打合せなど「+1」、通常の仕事場など「0」、レストランなど「-1」として3つのレベルに分ける。
- 6) 親疎：相手との親しさの程度に基づき「極めて親、親、やや親、やや疎、疎」の5つに分ける。本研究ではフォローアップ・インタビューでの対象者と関係者からの申告に基づいて分ける。
- 7) 会話：半沢（2003：12）に基づき「複数の話し手の交代によって成り立つことばの一まとまり」と規定する。本研究では一つの「場面」と「状況」におけることばの一まとまりを会話として分析する。
- 8) 発話：会話の分析の単位として「発話」を設定する。寺村他（2002：118）の「対話の場面では、話し手はひとまとまりのことばを発する。これを発話と呼ぶ」という考えに基づき、一発話は意味的・構文的整合性を持つまとまりがあるもので、沈黙と発話者が交代する箇所を区切ったものとする。

- 9) デスマス形：文末が「デスマス形」のもの。倒置法で話しているもの（「行きましたよ。昨日」など）、縮約形（「しちゃったんです」など）を含む。文字化資料では「0」で表す。
- 10) 非デスマス形：文末が「非デスマス形」のもの。尊敬語の「非デスマス形」（「いらっしゃる？」など）、簡略化された応答（「明日？」など）、自問自答（「どうしようかな」など）を含む。しかし、「言いさし<sup>1)</sup>」（「明日は、ちょっと…」など）は含めない。文字化資料では「-」で表す。
- 11) 話段：佐久間（2003：91）に基づき「意味内容上の相対的なまとまりとして区分される話題を表すもの」と規定する。なお、佐久間（2003：107-109）は「（会話には）次元の異なる話段として認定される発話連鎖が含まれており、大小様々な話題の統括関係による多重構造を形成している」として「大話段」「小話段」について記述しているが、本研究での「話段」は「大話段」を単位とする。
- 12) 「形」と「話体」：文末に関し先行研究では、「丁寧体・普通体」「敬体・常体」「デスマス体・非デスマス体」と体という言葉が使用されているが、本研究では「話体」を「話段」ごとに捉えたものとして用い、文末に関しては「形」を用いる。つまり、本研究における「デスマス形」「非デスマス形」は、文末の述語の形を示すものである。
- 13) 丁寧体：一つの「話段」において「デスマス形」の発話だけが続いているもの。【表1】<sup>2)</sup>の「発話者 1-TF」の「話段 1」が「丁寧体」である。

【表1】 丁寧体の話段—電話の会話—（本稿のデータ④話段1の文字化資料）

NO.	発話者	話段	発話	形
1	1-TF	1	1-TFです。	0
2	1-TF	1	どうも寒いですね。	0
3	1-TF	1	自転車に乗ってるんですか？ [笑い]	0
4	1-TF	1	寒いでしょう？ [笑い]	0
5	1-TF	1	そうですか。	0

- 14) 普通体：一つの「話段」において「非デスマス形」の発話だけが続いているもの。
- 15) 混合体：一つの「話段」において「デスマス形」の発話の中に「非デスマス形」の発話が一発話以上交じっているもの、あるいは「非デスマス形」の発話の中に「デスマス形」の発話が一発話以上交じっているもの。なお、「混合体」は次の3つに分ける。
  - ① 混合丁寧体：一つの「話段」において「デスマス形」の発話比率が高いもの。【表2】の「発話者 2-TF」の「話段 2」は、7発話中「デスマス形」5、「非デスマス形」2で、「デスマス形」の発話比率が高いため「混合丁寧体」である。

【表2】 混合丁寧体の話段—電話の会話—（データ⑩話段2の文字化資料）

NO.	発話者	話段	発話	形
1	2-TF	2	そしたら、30ってことですね。	0
2	2-TF	2	それはいいんじゃないですか。	0
3	2-TF	2	ええ、そうです。	0
4	2-TF	2	Dさん（会社名）が、E（会社名）経由でやるのか、その辺再度確認してと言ったのよ。	-
5	2-TF	2	で、ま、16日に行った時には、だいたいその辺、内諾してるっていうことで、話を進めたいのね。	-
6	2-TF	2	F（会社名）のⅢさんに、どっちに言うのと聞いてって言ったんです。	0
7	2-TF	2	ええ、そうです。	0

- ② 混合普通体：一つの「話段」において「非デスマス形」の発話比率が高いもの。
- ③ 同率混合体：一つの「話段」において「デスマス形」と「非デスマス形」の発話比率が同じもの。

### 3. 先行研究

本章では、「ダ体とデスマス体の混用」「スピーチレベルの混用」という表現で、「混合体」と同様のものについて言及している「スピーチレベルシフト」についての先行研究をとりあげ、概観する。

メーナード・K・泉子（1991）は大学生の友人同士をペアとして、20組の日常会話を録画し、文体混用がどういう表現的効果機能を持つか分析・考察を行い、「ダ体」が使用されるのは「①急に思い出したり、感情をそのまま表現する時」「②話者が物語の世界に入り眼前描写する時」「③話者同士が発話を共同作成する時」であると示している。

宇佐美（1995）は、同一話者の同一会話内におけるスピーチレベルシフトに着目し、スピーチレベルシフトがいかなる条件のもとで生じているか、また、談話上いかなる機能を持っているのかを明らかにしようと試み、男女2名に6通りの初対面話者を割り当て、それらの会話分析を行った。その結果、丁寧体から普通体へのシフトが「心理的文脈から起こる場合」と、「言語的文脈から起こる場合」があることを示している。

これらの先行研究は「混用」についても言及しているが、研究の中心は「何によってスピーチレベルが決定されるか」ということである。本研究はスピーチレベルのシフトが生起する要因を探るものではない。「混合体」が見られる要因を研究するものであり、また、「混合体」を「話段」を単位とした「話体」として捉え、分析・考察を行うという点で異なる。

### 4. 調査の対象者と方法

前述したように、調査の目的が日本人ビジネス関係者の「ビジネス場面」での会話の実態を明らかにすることである。そのため、生の会話を録音することとした。

中心の対象者は4名で、彼らと関わる者（以下関係者）との会話を録音した。その結果、対象者と関係者で20名分（延べ36名分）のデータが収集できた。20名の内訳は男性11名、女性9名。勤務先別に見ると、政府系機関15名、地方自治体2名、百貨店2名、専門学校1名である。政府系機関勤務者が大半を占めているが、百貨店からの出向者、前の勤務先が銀行や旅行会社という5名が含まれている。年代別では、20代3名、30代3名、40代8名、50代6名である。なお、全員が外国人ビジネス関係者と仕事上関わりがある。

データは対象者に録音機器（ICレコーダー）を渡し、できる限り様々な「場面」での会話を録音するように依頼して収集した。自然な会話を収集するため、研究内容についての説明は行わず、録音時間の指示も与えなかった。その結果、打合せや会議など20のデータ（延べ34データ）<sup>3</sup>、約9時間分が収集できた。

## 5. 分析方法

### 5.1 分類について

先行研究のスピーチレベルの分類は、丁寧体と普通体の2分類をとるもの(生田・井出1993)、敬体、丁寧体、普通体の3分類をとるもの(宇佐美1995)などがある。本研究では「デスマス形」と「非デスマス形」の2分類をとる。

### 5.2 「形」と「話体」の認定

録音した会話データは、【表3】のようにまず、データごとに全て文字化<sup>4</sup>し、一発話ごとに「デスマス形」「非デスマス形」「混合形<sup>5</sup>」「言いさし」「相づち」と認定していった。次に、一発話ごとに認定したものを基に「話段」を単位として、【表4】のように「丁寧体」「混合丁寧体」「同率混合体」「混合普通体」「普通体」と「話体」の認定を行った。「話体」の認定は分析の曖昧さを避けるため、主観的判断が必要な「混合形」「言いさし」などを含まず、客観的に判断できる「デスマス形」「非デスマス形」のみを対象とした。

「形」と「話体」の認定は、信頼性を高めるため、4名の日本語母語話者の協力を得て、一つのデータに関しては、筆者と必ずもう1名がチェックするという方法で行った。

【表3】 文字化表(データ②話段3の文字化資料)

NO.	発話者	話段	発話	形
1	1-TF	3	なんか、一気に2万円ぐらい、行きそうな感じじゃなかったんですか。	0
2	5-KM	3	それはあの一、中国が順風満帆に思われていることと同じじゃない?	-
3	1-TF	3	中国、ちょっとやばそうですね、そう書いてあった。	#
4	5-KM	3	この前、広州で、事件ありましたでしょう?	0
5	1-TF	3	そう、そう、広州。	-
6	5-KM	3	それは石炭化学で、彼らにとってすごい災害なのね。	-
7	1-TF	3	そうすると、ますます、日本株買う外資が入ってくるじゃないですか? 沈黙	0
8	1-TF	3	あっ、円高になるから買いにくいのかな。	-
9	5-KM	3	そう、直接左右するのは円高ですね。	0
10	1-TF	3	うーん。	
11	5-KM	3	円が高くなると、株に関しては必ずしも有利じゃないのね。	-
12	1-TF	3	そうですね。	0
13	5-KM	3	だから、痛し痒しと。	*

注) 形の欄の#は混合形、\*は言いさし、空欄は相づちを表す。

【表4】 話段別分析表(データ④の資料)

話段	発話者	発話数	デスマス形	非デスマス形	混合形	言いさし	相づち	話体
1	1-TF	5	5	0	0	0	0	丁寧
2	1-TF	5	5	0	0	0	0	丁寧
3	1-TF	9	7	2	0	0	0	混丁
4	1-TF	11	5	6	0	0	0	混普
5	1-TF	18	3	10	4	0	1	混普
6	1-TF	13	9	2	0	2	0	混丁
	総計	61	34	20	4	2	1	

最後に、どのような要因で「混合体」が現れるかを考察するために、【表5】のようにデータごとに「相手レベル」「場レベル」「親疎」「状況」について整理し、【図1】のように総話段数における各「話体」の話段数の比率をグラフに表した。

【表5】 「相手レベル」「場レベル」「親疎」「状況」表（データ①の資料）

発話者	自分の立場	相手の立場 / レベル	相手の性別 / 年齢	場レベル	親疎	状況
1-TF	上司	部下-1	女/40	+1	疎	打合せ・シンポジウムの相談
5-KM	部下	上司+1	男/40	+1	疎	〃

## 6. 分析結果と考察

各データを前述したような方法で分析した結果、今回のデータには「丁寧体」や「普通体」だけで成り立つものは見られなかった。つまり、今回のデータから「人間関係」「場」「親疎」「状況」が異なっても、「混合体」が見られることが明らかになった。

本章では、どのような要因によって「混合体」が現れるのかということを探るため、対象者に焦点を絞り、分析結果から各「話体」が高い比率で現れる要因を考察する。具体的には前章で述べた分析方法に基づき、総話段数における「丁寧体」「混合丁寧体」「同率混合体」「混合普通体」「普通体」のそれぞれの話段数の比率を出し、一つの「話体」の比率が他の「話体」の比率より高いものを取りあげて考察する。

本稿では紙幅の関係上、4名の対象者のうち、政府系機関に勤務する40代の女性管理職と、民間企業に勤務する40代の女性管理職の2名について見て行くが、「混合体」が現れる要因は、残りの2名の対象者の場合もほぼ同様の結果であった。

なお、考察はあくまでも今回のデータの分析結果に基づくものであり、データの範囲内で言えることとして記述する。

### 6.1 対象者1（女性、管理職、40代、政府系機関勤務）について

対象者1について、【表6】の8つのデータの分析結果から考察する。データ①と②の会話相手は同一人物である。

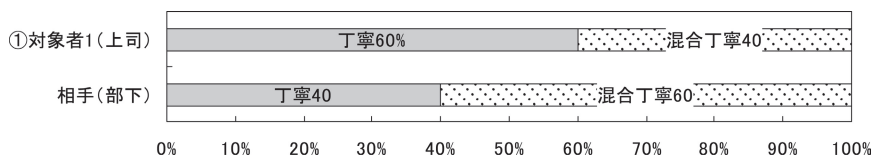
#### 1) 「丁寧体」が高い比率で現れた相手

8つのデータの中で、「丁寧体」が高い比率で現れたのは、データ①の同年配の男性部下との会話である。【図1】の通り、「丁寧体」は60%で、他のデータと比較すると高い。対象者1が上司として着任してから1週間目の会話である。フォローアップ・インタビューでは、相手は部下であるが、同年配で、一緒に仕事をしてから間もない時期であったため、意識して丁寧に話したということであった。このデータから、同年配で、親しくない異性の部下と仕事の話をする時に、「丁寧体」が高い比率で現れることが分かる。つまり、一緒に仕事をして間もない場合、役職の上下関係より、年齢、「親疎」が重視されると思われる。

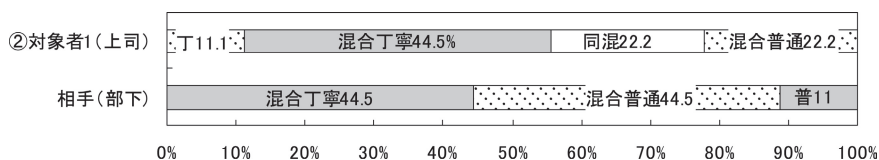
【表6】 対象者1と会話相手

データ NO.	自分（対象者1）の立場	相手の立場 / レベル	相手の性別 / 年齢	場レベル	親疎	状況
①	上司	部下-1	男性 / 40	+1	疎	打合せ・シンポジウムの相談
②	上司	部下-1	男性 / 40	-1	親	休憩・雑談
③	依頼側	他社受諾側+1	男性 / 40	0	やや親	電話・協力依頼
④	部下	元上司+1	男性 / 50	0	親	電話・事情伺い
⑤	同僚	同僚0	男性 / 40	0	親	電話・事情伺い
⑥	上司	部下-1	女性 / 30	+1	やや親	打合せ・資料の説明
⑦	上司	部下-1	女性 / 20	+1	親	打合せ・ホームページの相談
⑧	先輩	後輩-1	女性 / 30	-1	極めて親	休憩・雑談

データ②はデータ①の対象者1と男性部下の2ヵ月後の会話である。休憩時の雑談で、データ①と異なる点は、「場レベル」「親疎」「状況」である。親しくない関係から、通勤経路も同じであるということで、親しい関係になっている。【図2】を見ると、対象者1の方は「丁寧体」が約10%で、他は「混合丁寧体」「混合普通体」である。男性部下の方は、「丁寧体」がなく、「普通体」が約10%で、他は「混合丁寧体」と「混合普通体」である。このデータからは、親しくない関係から親しい関係になり、さらに「場レベル」が下がると、「丁寧体」は減少するか、あるいは消え、「混合体」の比率が高くなることが分かる。



【図1】 データ①対象者1（上司）と相手（部下）の会話における話体比率



【図2】 データ②対象者1（上司）と相手（部下）の会話における話体比率

## 2) 「混合丁寧体」が高い比率で現れた相手

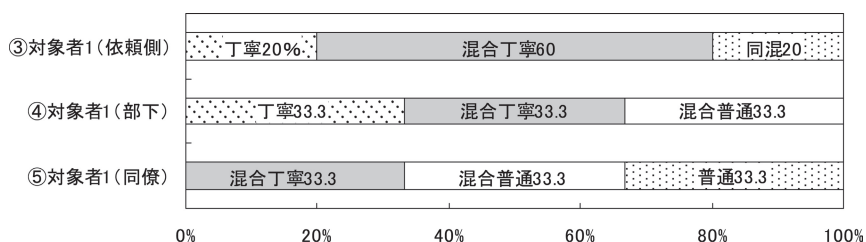
データ③の他社に勤務するやや親しい人が相手の時に、【図3】の通り、「混合丁寧体」が60%という比率で現れている。電話でシンポジウムのパネリストになってもらうことを依頼しているという状況である。このデータから、他社の人への依頼でも、同年配で、やや親しい関係なら、「丁寧体」が高い比率で現れるわけではなく、「混合丁寧体」の方が高い比率になることが分かる。

## 3) 「丁寧体」と「混合丁寧体」が同比率で現れた相手

【図3】データ④は「丁寧体」と「混合丁寧体」が33%ずつ現れ、「混合普通体」も同率の33%現れている。相手は年齢が10歳離れている元上司であるが、同じ大学出身ということで親しい関係である。事業展開のために元上司から情報を得ているという状況である。

同様に電話での会話であるデータ③と④を比較してみると、③は「丁寧体」と「混合丁寧体」で80%を占めていることから、対象者1は他社のやや親しい相手の方が丁寧に話していると思われる。このデータから、「相手レベル」と「場レベル」が同じ場合、残りの要因の「親疎」と「状況」が各「話体」の比率に影響していることが分かる。

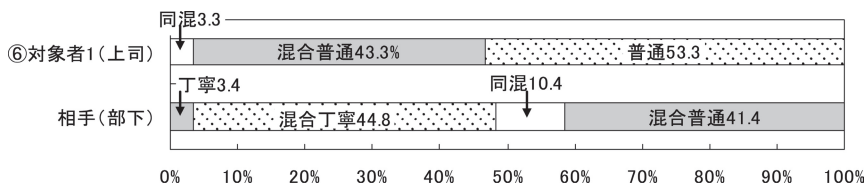
データ③④と同様に、電話で仕事の会話をしている【図3】データ⑤についても見てみる。相手は親しい同僚であるため、データ③と④には現れていなかった「普通体」が現れている。データ④の元上司を相手とした場合と比較してみると、「場」「親疎」「状況」が同じことから、残りの要因の「相手レベル」が各「話体」の比率に影響していることが分かる。つまり、いくつかの要因が同じ場合、残りの要因が明らかに各「話体」の比率に影響している。



【図3】 データ③～⑤対象者1(依頼側・部下・同僚)の会話における話体比率

## 4) 「混合普通体」が高い比率で現れた相手

対象者1の場合、「混合普通体」が他の「話体」よりも高い比率で現れているデータはない。【図4】の通り、データ⑥は43%と他のデータより高いが、「混合普通体」より「普通体」の比率の方が少し高い。相手はやや親しい、同性の30代の部下である。このデータから、10歳以上年の離れた部下でも、やや親しい関係なら、仕事の話をする場合でも、「普通体」だけにならず、「混合普通体」も現れることが分かる。親しい部下の場合は【図5】の通り、「普通体」の比率がさらに高くなる。



【図4】 データ⑥対象者1(上司)と相手(部下)の会話における話体比率

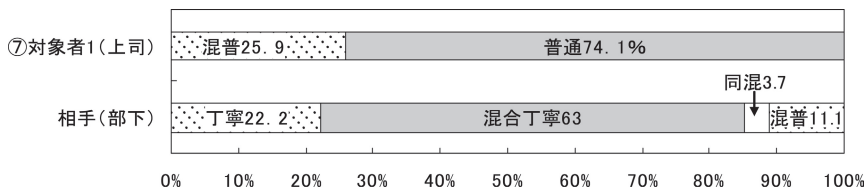


5) 「普通体」が高い比率で現れた相手

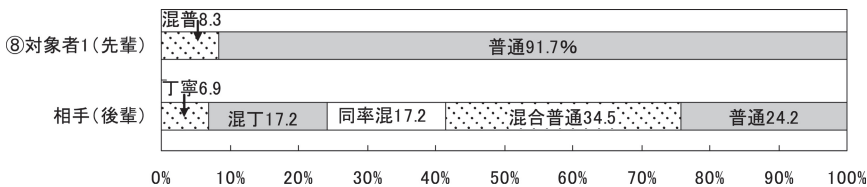
【図5】と【図6】の通り、データ⑦と⑧に74%、91%と高い比率で「普通体」が現れている。データ⑦の相手は20歳以上年の離れた同性の部下ではあるが、親しい関係である上、信頼もしている。データ⑧の相手は、以前、同じ部署で仕事をしたことがあるという30代の極めて親しい後輩である。⑦は会議室での打合せ、⑧は昼食時のレストランでの雑談と「場」と「状況」が異なるが、「普通体」は他のデータと比べ高い比率で現れている。これらのデータから、「普通体」が高い比率で現れるのは、「場」に関わらず、10歳以上年の離れた同性の親しい部下や後輩と話す時であると言える。特に、【図6】データ⑧の通り、極めて親しい後輩と「場レベル」-1での雑談という場合は、91%と全データの中で一番高い比率で現れている。極めて親しい関係ということがポイントであろう。

次に、【図5】データ⑦の相手である部下に注目すると、「丁寧体」と「混合丁寧体」で約85%を占めており、対象者1と対照的な話し方をしていることが分かる。フォローアップ・インタビューの結果、上司である対象者1は部下と親しい関係であると思っているが、部下の方は年齢差があるため、やや親しいぐらいの関係にしか思っていないということが分かった。また、仕事の打合せで、指示を受ける立場であったため、上司とは対照的な話し方になったと思われる。

【図6】の通り、データ⑧の相手である後輩の方は、「丁寧体」から「普通体」まで全ての「話体」が現れている。他のデータには見られない珍しいケースである。後輩は対象者1と親しい関係だと思っているが、年齢が10歳以上離れていること、勤務地が異なったため数年ぶりの再会であったことなどから、会話初めには「丁寧体」「混合丁寧体」が現れ、会話が進むに従って、「混合普通体」「普通体」に移行している。つまり、親しい関係でも、久しぶりに会った先輩との会話の場合、初めは少し緊張するが、すぐにリラックスできるので、様々な「話体」が現れると思われる。



【図5】 データ⑦対象者1(上司)と相手(部下)の会話における話体比率



【図6】 データ⑧対象者1(先輩)と相手(後輩)の会話における話体比率

6.2 対象者2(女性、管理職、40代、百貨店勤務)について

本節では対象者2について見ていく。分析対象となる相手は、【表7】の4名である。

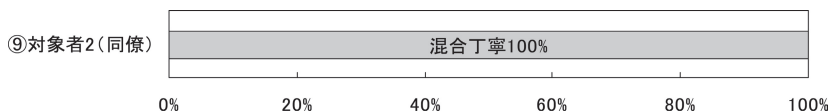
【表7】対象者2と会話相手

データNO.	自分(対象者2)の立場	相手の立場/レベル	相手の性別/年齢	場レベル	親疎	状況
⑨	同僚	同僚-1	男性/40	0	疎	電話・事情説明
⑩	依頼側	他機関協力者+1	男性/50	+1	親	会議・助言求め
⑪	依頼側	他機関協力者+1	男性/40	+1	親	会議・助言求め
⑫	依頼側	他社支援側+1	男性/40	+1	疎	会議・支援依頼

## 1) 「混合丁寧体」が高い比率で現れた相手

対象者2の場合、どのデータにも「混合丁寧体」が50%以上現れている。特に、【図7】データ⑨の同僚との電話の会話には100%という高い比率で現れている。この同僚とはあまり親しくない。このデータから、親しくない同僚と、電話で仕事の話をする時に、「混合丁寧体」が高い比率で現れることが分かる。但し、工作上発生した問題について話すという他のデータにはない特別な状況であったため、通常その相手と話す時よりは丁寧になった可能性もある。

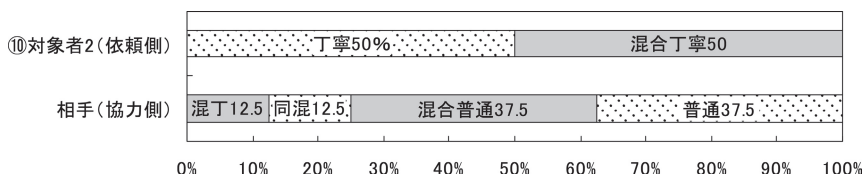
データ⑨と同様に、同僚と電話で会話をしている対象者1のデータ⑤（【図3】参照）の方は、親しい関係であり、データ⑨と「親疎」「状況」で異なるため、「混合丁寧体」「混合普通体」「普通体」という3つの「話体」が現れている。



【図7】データ⑨対象者2(同僚)と相手(同僚)の会話における話体比率

## 2) 「丁寧体」と「混合丁寧体」が同比率で現れた相手

対象者2には「丁寧体」の比率が他の「話体」より高いというデータはないが、【図8】データ⑩は「丁寧体」と「混合丁寧体」の比率が50%ずつである。対象者1のデータ④（【図3】参照）の「丁寧体」と「混合丁寧体」の同比率よりも高い。データ⑩の相手は50代他機関の役員で、親しい関係である。対象者2にとっては以前から協力を受けている相手でもあり、信頼している。



【図8】データ⑩対象者2(依頼側)と相手(協力側)の会話における話体比率

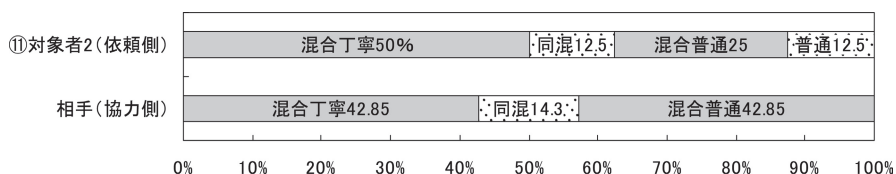
対象者1のデータ④の結果も踏まえて考察すると、年齢差のある親しい「相手レベル」+1の人と、仕事の話をする時、「丁寧体」と「混合丁寧体」が同じような比率で現れる

ことが分かる。なお、他機関の人を相手とする場合は、元上司を相手とする場合と異なり、「混合普通体」は現れないようである。

### 3) 「混合体」が高い比率で現れた相手

「混合丁寧体」「同率混合体」「混合普通体」の合計の比率が高いのは、【図9】データ⑪で、約87%という比率である。相手は同年配の他機関の管理職で、親しい関係である。データ⑩の相手である役員の部下で、同じ会議での会話である。このデータから、他機関の人でも、同年配の親しい人なら、「場レベル」+1でさえ、「混合体」の比率が高くなると思われる。なお、相手にも注目してみると、100%「混合体」になっていることが分かる。他機関の人同士でも、親しい場合、お互いに「混合体」の比率が高くなるものと思われる。

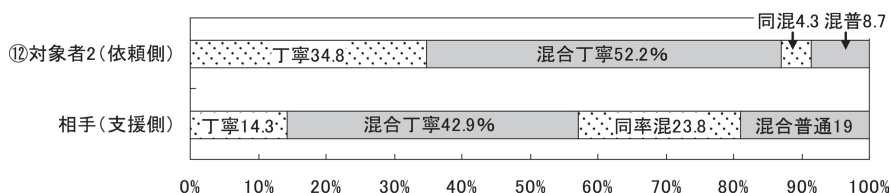
同様に他社の同年配の人と会話をしている対象者1のデータ③（【図3】参照）と比較すると、③の方が「丁寧体」「混合丁寧体」「同率混合体」という構成で、対象者2のデータ⑪より丁寧に話していることが分かる。これは「親疎」の違いと、電話での会話と直接対面しての会話という違いが影響していると思われる。



【図9】 データ⑪対象者2（依頼側）と相手（協力側）の会話における話体比率

### 4) 「初対面」の人との会話

対象者2のデータ⑫は、他機関の初対面の人との会話である。一般的には、他社、他機関の初対面の人との会話は、「丁寧体」だけで成り立つと考えられるが、【図10】の通り「丁寧体」だけではないことが分かる。相手は対象者2の会社の事業を支援する機関の管理職で、同年配である。どちらも「丁寧体」より「混合丁寧体」の比率が高くなっているのは、依頼側、支援側という力関係はあるが、同じ管理職で、同年配ということが影響していると思われる。



【図10】 データ⑫対象者2（依頼側）と相手（支援側）の会話における話体比率

## 7. まとめと待遇コミュニケーション教育への提言

本章では「混合体」に関して整理し、次に待遇コミュニケーション教育への提言を行う。

「ビジネス場面」においては、上司や他社の人など「相手レベル」+1の人と会話をする場合、「場レベル」や「親疎」に関わらず「丁寧体」だけが見られると考えられている。しかし、データ①②⑥⑦の対象者1（上司）の会話相手である部下は、「丁寧体」より「混合丁寧体」の比率が高く、データ②⑦の部下のように上司と親しい関係である場合は、3つか4つの「話体」が現れる。また、他社の人との会話であるデータ⑩⑪⑫の対象者2（依頼側）を見ると分かるように、「場レベル」+1での会話でも、データ⑩のように「混合丁寧体」が半分現れたり、データ⑪⑫のように同年配である場合は、3つか4つの「話体」が現れたりする。同年配でなおかつ親しい場合は、データ⑪のように「丁寧体」は現れない。

次に、「普通体」だけが見られると考えられている部下や後輩など、「相手レベル」-1の人との「場レベル」-1での会話を見てみる。データ②⑧の対象者1（上司・先輩）の会話の「場面」である。②の場合は、「普通体」を除いた4つの「話体」が現れている。これは部下であっても同年配の異性ということが影響していると思われる。⑧は極めて親しい後輩との会話で「普通体」が92%現れている。しかし、100%ではない。

前述したように、今回のデータからは「丁寧体」と「普通体」だけで成り立つ会話は見られず、様々な「場面」と「状況」で「混合体」が見られることが分かった。このように現実に「混合体」が広く見られるなら、日本語教育の現場でも「混合体」の実態を提示し、指導することが必要ではないだろうか。

具体的には、今回のデータの分析・考察から判明した「混合体」が現れる要因を基に、学習者には「混合体」と「親疎」の「人間関係」、「場」の「状況」などを組み合わせて提示することが有効だと思われる。学習者の立場に立つと、「ビジネス場面」で見られる「混合体」に気づきながらも、自分自身では「混合体」と「親疎」の「人間関係」、「場」の「状況」などを的確に結び付けることが困難なのだと思う。上司や他社の人と親しくなった場合、どのような「場」の「状況」で、どのような「混合体」が見られると効果的か、などというような判断は難しい。そのため、「相手レベル」+1の親しい人と、「場レベル」-1で雑談をする場合に見られる「混合体」などと具体的に提示し、指導して行くことが必要だと考える。

授業内容としては、前述したように「混合体」で成り立つ実際の会話を提示し、「丁寧体」だけ、「普通体」だけの会話と比較しながら、「混合体」のコミュニケーション上の効果を学習者に考えさせ、意識化を促すことが一つのアイデアだと思われる。このように「混合体」を効果的に使用して、社内外の関係者とうまくコミュニケーションをとっている日本人ビジネス関係者の会話を、モデルとして提示することが学習者には参考になるであろう。

## 8. 今後の課題

「ビジネス場面」の日本人ビジネス関係者の会話をデータとして、「混合体」を中心に分析・考察を行ったが、分析の方法や調査対象者の点で問題は残っている。

今回は分析の曖昧さを避けるため、「混合形」「言いさし」などを除いたが、会話の中には「混合形」「言いさし」などが多く見られたため、これらを主観的に判断した場合、分析結果が異なった可能性も残る。今回の方法で傾向は見られたと思うが、再検討しなければならないと考える。また、今回のデータは4つの業種の人達だけであった。そのため、分析結果が一般的であると断言することはまだ難しい。データから様々な「場面」や「状況」で「混合体」が出現することが分かったが、この結果を一般化するためには他の業種の人達にも対象を広げて、会話データを収集し、分析・考察することが必要である。

今後は分析方法を再検討した上で、調査範囲を広げてデータを収集し、「混合体」についてさらに研究を進めていきたい。

## 注

- 1) 聞き手のさえぎりや自分の意志によって、発話末まで言っていないもの。
- 2) 本稿に掲載した【表】及び【図】は、2006年9月に提出した早稲田大学大学院日本語教育研究科修士論文「日本人ビジネス関係者の待遇コミュニケーションに関する考察—「混合体」の問題を中心に—」の会話データの文字化資料、話段別分析表、各話体の比率表などの一部である。但し、本稿を執筆するにあたり、分析方法を見直し、改訂したため、本稿に掲載してある【表】及び【図】は、改訂した分析方法に基づいて表してある。
- 3) 20のデータのうち6つは3名以上の打合せや会議である。その場合、全員に向けた発話や個人に向けた発話などがある。それらを個別に分析した結果、延べ34のデータとなった。
- 4) ザトラウスキー（1993）に準拠して文字化した。
- 5) 「そんなことないですよ。そんなことない。」など、一発話が二文以上の連続したもので構成され、「デスマス形」と「非デスマス形」が混合しているもの。

## 参考文献

- 生田少子・井出祥子（1983）「社会言語学における談話研究」『月刊言語』第12号、大修館書店
- 宇佐美まゆみ（1995）「談話レベルから見た敬語使用—スピーチレベルシフト生起の条件と機能」『学苑』第662号、昭和女子大学近代文学研究所
- 蒲谷宏・川口義一・坂本恵（1998）『敬語表現』大修館書店
- 蒲谷宏（2003）「「待遇コミュニケーション教育」の構想」『講座日本語教育』第39分冊、早稲田大学日本語研究教育センター
- 佐久間まゆみ（2003）「文章・談話における「段」の統括機能」『朝倉日本語講座⑦文章・談話』朝倉書店
- ザトラウスキー・ポリー（1993）「日本語の談話の構造分析—勧誘ストラテジーの考察—」くろしお出版
- 寺村秀夫・佐久間まゆみ・杉戸清樹・半澤幹一（2002）「ケーススタディ日本語の文章・談話」おうふう
- 半澤幹一（2003）「文章・談話の定義と分類」『朝倉日本語講座⑦文章・談話』朝倉書店
- 水谷修（1994）「ビジネス日本語を考える—公的話しことばを求めて—」『日本語学』13-12、明治書院
- メイナード・K・泉子（1991）「文体の意味—ダ体とデスマス体の混用について」『月刊言語』第20号、大修館書店